

ラストシヤフル

登場人物

横田恭平（よこたきようへい）……………遊び人
水本久美（みずのくみ）……………恭平の恋人
尾早稲重吉（おわせじゆうきち）……………老人、引退した商社マン
尾早稲文代（おわせふみよ）……………重吉の妹
尾早稲政伸（おわせまさのぶ）……………重吉の息子
金子清次・セイさん（かねこせいじ）……………魚屋の息子、
塩野元典・ノリ（しおのもとのり）……………食品店の息子
丹波吉之・タンキチ（たんばよしゆき）……………金物屋の息子
白川麗・ママ（しらかわれい）……………スナック向日葵のママ
池上律子（いけがみりつこ）……………豆腐屋の娘
向井敏子（むかいとしこ）……………派遣社員
神原公子（かんばらきみこ）……………家事見習い
国江田文二（くにえだぶんじ）……………民生委員
山内忠史（やまうちただし）……………ガードマン

正面奥に微かな照明、暗い部屋、男のシルエット、冷蔵庫を開け、缶ビールの入ったビール袋を取り出す。ビールを一気飲み、飲み終わった缶を捨て、袋を持って退場。電源ブレーカーが落ちる音、壁の照明が消える。やがて高窓から差し込む月明かり。ぼんやりと浮かぶフローリングの部屋。散らばった本や衣類。上手側にエレベーターがある。タンスの引き出しは引き出されたままで、空き巣に入られた後の様な状態。しばらくして、下手ドアより恭平登場。辺りを懐中電灯で照らす。

恭平

何だよこれ、どういう生活してたんだよこの住人は。ちよつとは片づけろってんだよ。(異変に気づく)：嘘だろ：(タンスの引き出しを照らす)くっそ。(落胆し、へたり込む。部屋の外で何かぶつかる音)

久美(声)

いたっ、痛い、

恭平

あの野郎。

久美(声)

恭平く、ねえどこにいるの、恭平く。

恭平

ここだよ。

(下手ドアより懐中電灯を手に久美登場)

久美

あつ、恭平いた。良かった。二階かと思って上に上がっちゃった。(恭平、久美を無視)ねえ、私おでこぶつけちゃったの(懐中電灯で自分の顔を照らし)ここんとこ、ねえ腫れてない。

恭平

あのな(恭平も懐中電灯で自分の顔を照らし)俺たち今何してんだ。

久美

何って、

恭平

表で見張ってろって言ったろ。

久美

だって、恭平の事が心配だから。

恭平

言われた通りにしろよ。

久美

見張りは要らないと思うけどな。

恭平

何でだよ。

久美

そんなに人も通らないし。

恭平

馬鹿、近所に飲み屋とかあるし夜中でも結構人通りは多いんだよこの辺りは。

久美

そうかも知れないけど、こんな夜中に表で見張ってたらかえって怪し

まれるんじゃないかな。

馬鹿、怪しまれたってな（久美の言う事が正しいと気づく）…とにかく、

分った、恭平の言うとおりにするよ、ごめんね。（出て行こうとする）

もういいよ。

恭平

いいの…ごめん。

久美

とにかく、お前は声でか過ぎ。

恭平

分った、気を付ける。

久美

それからな…今日はもう帰る。

恭平

えっ、どうして、もう終わったの？

久美

先客だよ。

恭平

先客？

久美

遅かったんだよ俺たち。先に誰かに荒らされてる。

久美

え、(懐中電灯で辺りを照らす)そつかり、変だと思ったのよね。だつて上もすごい散らかってたから…そういうこと。

恭平

ついてねえよ。

久美

ねえ、電気点けていい？(壁のスイッチを入れるが照明は点かない)

恭平

馬鹿、電気なんか来てるわけないだろ。

久美

大元かな、(懐中電灯で照らしながら)ブレーカーどこだろ。(下手に消える)

恭平

人が住んでないんだぞここは、何で空家に電気なんか、

(ブレーカーを上げる音、照明が点く、同時に今まで消えていた上手のエレベーターの電源も入り数字や三角の矢印が見える)

久美

(登場) 点いちやった。

恭平

…とにかく、こんな感じじゃ何も残っちゃいねえよ。本当ついてねえな。

久美

ねえ見て、これエレベーターじゃない。すごいね家の中にこんななあ

るんだ。いくら位するんだろ。

いくらしたってエレベーターじゃ持ち出せないだろ。

恭平

…また失敗ね。

久美

恭平

おい、またって何だよ、またって。

久美

あ、ごめん、そういうつもりじゃ、

恭平

お前さ、どうして人が落ち込んでる時に余計落ち込むような事言うわけ。

久美

だからごめん、ごめんね恭平。

恭平

普通空き巣に入ってみたら先を越されてたなんて事ないだろ。誰がそんな事予想出来んだよ。

久美

でも、似たような事ばかりだったから恭平の場合。あつ、ごめん。

恭平

お前ね、こんな時に、（携帯のバイブが恭平のポケットの中で鳴る）

久美

こんな時に、電源入れといたんだ。

恭平 マナーモードだよ(携帯を取り出そうとするが、なかなか取り出せない)

久美 普通、電源切っとくよね。

恭平 (やっと取り出し) 大事な用かも知れないだろ。

久美 泥棒してる最中に電話に出るんだ。

恭平 ああ出るさ。

久美 もしもし今警察に追われてるから手短に。

恭平 あのな、

久美 出ないの。

恭平 出るよ(携帯の表示を見て)くそ、

久美 (察しがつき)貸して。(携帯を取る)

恭平 おい、

久美 (出る)もしもし、

恭平

切れよ。

久美

はい、はい、

恭平

切れって。

久美

いえあの、横田の妹です。

恭平

妹、

久美

兄、携帯忘れて出かけちゃって…ええ、聞いてます。

恭平

切ればいいんだよそんなの。

久美

それは何とかするって兄も言っていました。ただもう少しだけ待ってもらえたら、ええ、でもすごく反省してるみたいで、必ず返済するんだって言ってます。

恭平

言っつてねえよそんな事。

久美

あの、兄は本当はいい人間なんです。たまたま今お金がなくて、だからあの、ブラックリストとかに載せるのだけは、

恭平

(携帯を奪い)もしもし、俺横田恭平、そんな金払えないし払うつもり

も無いから。(切る)

久美

恭平、

恭平

何勝手に作り話してんだよ。

久美

だって恭平、大きな借金さえ払ったら真面目に働くって言ったじゃん。だったらブラックリストとかに載せられたらまずいじゃない、だから、

恭平

そんなのとっくに載ってるよ。

久美

そうなの、

恭平

そうだよ。それにサラ金に泣き落としは効かないんだよ。何言ってもこつちが金を払うまで奴らはどこまでも追いかけてくるし、逆に金さえ払えばすぐに手のひらひっくり返して、又のご利用をお待ちしてまゝすだ。そんなもんなんだよ。

久美

そうなんだ。

恭平

まったく、何が妹だよ。

久美

…ねえ、恭平。ちゃんと仕事探すんだよね。そして結婚するんだよね、

私と。

恭平 何度もしつこい。

久美 だって、

恭平 何で俺を信じないわけ、その為にこんな事やってんだらう。

久美 だけど、

恭平 約束はちゃんと守る。

久美 ……この後、どうするの。

恭平 この後って、

久美 まずは大きな借金返すんでしょ。でも、これ失敗しちゃったし、何か考えなきゃならないでしょ。

恭平 ……狙いは良かったんだよ、ただ運が悪かっただけさ…場所変えるか。

久美 え、

恭平 そうだな、別にここにこだわる必要はないんだよな、世の中金持ちの

家はごまんと有るし。

久美

話が違う。

恭平

何だよ。

久美

話が違うよ恭平。

恭平

うるせえな。

久美

恭平言ったじゃん。

恭平

何を。

久美
これは泥棒じゃない、身寄りのないおじいさんが亡くなって、放つといたら役所とかが処分する物を頂くだけだって、誰にも迷惑掛けないって、だから私、

恭平

状況が変わったんだよ。

久美

恭平、それじゃあ只の泥棒だよ。

恭平

しようがないだろ。

久美

：私、私、（泣く）泥棒の奥さんにはなれない。私、私、

恭平

何だよもう。

久美

（泣きながら）ここに入るんだって、私嫌だつて言ったじゃん。

恭平

泣くなよ、泣くなつて、

久美

私、私、生まれて一度も人の物なんか盗った事ないもん。

恭平

あのな、だからそれはな、

久美

本当に、本当に嫌だったんだよ。だけど恭平が、誰にも迷惑掛けないつて言ったから、サラ金から解放されたら真面目に働くつて言ったから、だから私、私、

恭平

よし分かった、俺が悪かった、悪かったよ（久美の両肩を掴み）謝る、謝るから泣くなよ。

久美

それなのに、ここがダメだから他の家に泥棒に行くなんて、

恭平

本気じゃないよ。お前があまりしつこいからさ、だから俺もついな、

久美

嘘、状況が変わったなんて言ったじゃん。

恭平 勢いで言ったただけだよ。俺だってさすがにそこまで落ちぶれたくはないって。

久美 本当。

恭平 ああ。

久美 じゃあ何を当たるなんて無しだよね。

恭平 ああ。

久美 良かった。

恭平 あのな久美、確かに俺は今までアンラッキーなところがあつてさ結構失敗もしたよ。

久美 失敗だらけだもんね。

恭平 そうだよ失敗だらけだよ、ここんとこずつともがき続けてるって感じだよ、結果も出ないし。だけどそれは努力だろ。じゃあ俺は一体誰のために努力してんだよ。

久美 私のため、

恭平

そうだよ、お前のためだろ久美。

久美

そうよね。

恭平

正直言って、ちゃらんぼらんばな俺はさ、毎日面白おかしく暮らせたらそれが一番だと思ってる。けどお前と一緒にいるって決めたから今こうして頑張ってるんだろ。

久美

そうだよね。

恭平

信じてくれよ。

久美

ごめんね、本当は信じてるのよ恭平の事。でも私弱いから、ちょっとダメだともう全部ダメだってなっちゃうのよね。

恭平

お前、普段明るいくせにちょっととした事で悲観的になる傾向があるよな。

久美

ごめん。もっと明るく考えるようにするね。

恭平

そう言う事。ポジティブ、ポジティブ。(久美の顔を覗き込み笑う)そう
だ、久美、この状況もまだ諦めるのは早いかな。

久美

えっ、

恭平

もしかしたら先客が見落とした物が残ってるかも知れないぞ。

久美

見落としたもの、

恭平

だからさ、大した物じゃなくても、見つけにくい所に隠したへそくりとかさ。せつかく入ったんだし、ダメもとで探してみようぜ。

久美

そうね。

恭平

案外残ってんじゃないかな。

久美

残ってるかもね。

恭平

(落ちている本を手に取り、ページを繰りながら)こんな本の間に現金挟んでたりとかさ。(ダンスに向かい)あと引き出しも中に敷いてる新聞紙の下とかさ。

久美

額縁の裏とか、床の間の壺の中。

恭平

そうそう、

久美

宝探してみたいね。

恭平

よし、久美は別の部屋探しな、ここは俺が担当だ。

久美

うん、なんか楽しくなってきた。

恭平

どっちが先にでかい獲物見つけるか、競争だ。

久美

ようし、負けないよ。(上手ドアに)私こっち見てみるね。(退場)

恭平

がんばれよう。めでたい奴だ。(携帯を取り出しダイヤル。発信音)あ、エリちゃん、俺、恭平君。誕生日おめでとう。店もう終わったんだろ。ごめんね、顔出さなかったんだけど急に仕事入っちゃって。え、あ、電話くれたんだ、そうか。いや電波の入りが悪い所にいたから。うん、うん、花届いた、結構綺麗でしょ。普段花なんて買わないから、ちよつと照れくさかったけど、エリちゃんの喜ぶ顔がみたくてさ。気にしないでいいんだって、俺の方こそこの間は仕事の愚痴ばかり聞かせちゃって、お詫びの印だよ。それはこっちのセリフ、エリちゃんの方が優しいよ。俺のつまらない話を親身になって聞いてくれて、エリちゃんはさ、目に嘘がないんだよね。ぶっちゃけ水商売やってる子にもこんな純な子がいるんだって驚いたもんマジでマジで。俺も酔ってたから話くどかったよね、ごめんごめん。弁護士なんて仕事も結構ストレスたまるんだよね。うん、うん、そうそう、それでさ、エリちゃん、今度の、

久美

恭平〜。

恭平

あ、ごめんキャッチ入った、こんな時間にクライアントから電話だ。参ったな。また店に顔出すから、その時にゆつくりと、本当にゴメンね、じゃあ。

久美

（上手ドアより登場）恭平、今電話してた？

恭平

う、うん、ていうか、電源切ったつもりが切れてなくてさ、さっきのサラ金だよ。

久美

そっか、

恭平

しつこいよな、まったく。なんだよ。

久美

あのね、廊下の角に電話があったのね。

恭平

そりゃあ電話くらいあるだろ。

久美

じゃなくて、その電話、留守電のランプがピコピコしてたのよ。それで私なんだからって思って聞いてみたの。

恭平

メッセージか、

久美 うん、そしたらさ、駅前の銀行からで、定期預金がもうすぐ満期になるから引き続きお預けください、みたいな話なの。

恭平 銀行の営業か。ちくしよう、そんな電話が掛かってくるなんて、相当預けてんだな。

久美 そう思うでしょ。

恭平 百万、二百万じゃそんな電話掛かってこないさ。

久美 だよね。

恭平 有るところには有るんだよ金なんて。だけどその通帳も先客の奴が持つてつちまつたんだよな多分。本当にもう一足早けりやな。

久美 でも分んないよ。もしかしたら恭平が言ったようにまだここに有るかも。

恭平 まさか、いや、そうだよな。可能性がないわけじゃないよな。一千万、二千万なんて事もな。

久美 でしょう。

恭平 よし、こいつは本腰入れて探さなきゃな。久美、作戦変更だ、二人してまずこの部屋から片付けよう。

久美 一緒にやるの？

恭平 そう、一部屋一部屋順序良くだ。

久美 分った。

恭平 日が昇るまで徹夜でやれば時間はたつぷりある。

久美 隅から隅までしらみつぶして事ね。

恭平 そういう事だ、(二人でそこら中に転がっている物や家具の中、飾りの置物を調べ始める)久美、あり得ないような所もちゃんと見るんだぞ。

久美 分った、

恭平 何か残つてるとしたら、誰もが見落とすような所だからな。

久美 見落とす様な所ね。例えば(冷蔵庫を開けながら)冷蔵庫の中とかも。

恭平 甘い、冷蔵庫だったら中に入ってる竹輪の穴も残らずチェックだ。

久美

なるほど、(竹輪を見つけ)あ、本当に入ってた。

恭平

(ベッドの上に飛び乗り、壁に掛かった額縁をひっくり返したりしながら)出てこい、出てこいお宝さん、

久美

(竹輪を)あれ、

恭平

絶対見つけてやるからな。(ベッドの毛布を剥がす。壁とベッドの間に落ちていた人間の足が現れる。二人は気づかない)くそ、どこなんだ。

久美

(竹輪を)ねえ、これ新しいよ。

恭平

だったら食つちまいな。

久美

そういう事じゃなくて、今日の日付なのよ、ていう事はさ、

恭平

久美、しゃべってないでちゃんと探せよ。

久美

だけどこれさ(足に気づき)恭平、恭平、

恭平

何だよ。

久美

そ、それ。

恭平 (足を見る) ん？

久美 それ、もしかして、

恭平 な、な、な、何だよこれ、人、人、人、人、

久美 人の…足だよ、

恭平 (覗き込み) く、く、く、久美、ひ、ひ、ひ、ひ、人が、死んでる。

久美 恭平、

恭平 うわ、(パニック)

久美 落ち着いてよ恭平。

恭平 そうだ、落ち着け、落ち着け、落ち着け、(怒鳴る) 落ち着けよ久美。

久美 何言ってるの。

恭平 も、も、も、もしかして、もしかして、もしかして、

久美 もしかして何よ、

恭平 さ、さ、さ、先、先、あき、あき、あき、あき、あき、あき、ごう、ごう、ごう、ごう、

久美 (恭平を叩く) だから何よ、

恭平 先に入った奴ら空き巢じゃなくて、強盗殺人犯じゃないのか。

久美 どうすんのよ。

恭平 やばい、やばいやばい、絶対にやばいよ、

久美 分かってるよ。

恭平 こんなんで俺たちが犯人に間違えられたりしたら、冗談じゃない。

久美 逃げよう、逃げよう恭平。

恭平 そうだ、逃げよう (ドアに向かう)

久美 あく、待って、

恭平 何だよ、

久美 指紋、

恭平 指紋、そうだよな。

久美 もうべたべたに付いてんじやん、

恭平 どうしよう。

久美 どうしようって、だいたい私達、こんなことやるのに何で手袋もしてないの。

恭平 ごめん、忘れてた。

久美 恭平。

恭平 くっそ。

重吉 う、うーん、

恭平 ん？

久美 恭平、

重吉 あ、たたたた、うーん、

恭平 …生きてるってか、

重吉 おい、おい、

久美 …恭平、どうしよう。

恭平 逃げよう、逃げよう久美。

久美 放っとくの、

恭平 しょうがないだろ。

重吉 お、おい、

(久美、重吉を覗き込む)

恭平 久美、

久美 大丈夫ですか、(恭平に) お爺さん。

恭平 関係ねえよ。

久美 このままじゃきつと死んじやう。

恭平

とにかく逃げよう。

重吉

お、おい、おい、（手が見える）引っ張ってくれ。

久美

ちよつと待ってね、

恭平

やめろよ。

久美

（重吉を引っ張り上げようとする）よいしょつと、（上がらない）重い、もいっかしいきますよ。よいしょつ、（無理）

恭平

どけよ。（久美を押しつけ重吉を起こす）

重吉

いた、いたたた、痛い、たたたた、（重吉、ベッドの上に座る）ふう、ひどい目にあつた。（一息ついた後、恭平と久美を見据える）

久美

あの、大丈夫ですか。

恭平

俺たち、その、何て言うか、

久美

怪しい者じゃないんです。

恭平

そう、あの、只の通りすがりで、

久美

(恭平に) 家の中で通りすがりなんて無いでしょ。

恭平

そ、そうだな、俺たちあの、

重吉

(恭平に) いつ帰ったんだ。

恭平

え、

重吉

帰るんだったら、なぜ連絡を入れん。

久美

あの、

重吉

お前はいつもそうだ。

久美

(恭平に) 知り合い？

恭平

んなわけないだろ。

重吉

政伸、

恭平

へっ？

重吉

政伸、

久美　ねえ、どうなってるの、政伸って誰、

恭平　そうか、呆けてんだよこの爺さん。俺を誰かと勘違いしてる。

久美　え、

恭平　そっか、話を合わせりゃいいんだよ。

重吉　政伸、

恭平　はい、

重吉　その女は誰だ。

恭平　あ、こいつ、俺の友達。

重吉　ガールフレンドか。

恭平　まあ、そんな感じ。

久美　そ、そう、えっと、政伸のガールフレンドです。よろしくお願いします。

重吉　（久美をじろりと睨み、恭平に）商売女か。

久美

えっ、

重吉

お前が連れて来たんだ、どうせろくな者じゃないだろ。

久美

何よ、失礼ね。

恭平

(耳打ち) 気にすんなって。それより通帳とハンコ、どこにあるのか聞き出そう。

久美

何言ってるのよ恭平、嫌よ私、お爺さん死んでないじゃん。

恭平

堅い事言うなよ、

久美

信じらんない。

恭平

呆けた爺さんが金持っても意味無いだろ。俺らで有効活用してやろうぜ。

久美

嘘つき、

重吉

政伸、

恭平

はいはい、何でしょう。

重吉 水をくれ、喉が渴いた。

恭平 水、はいはい、(久美に) 水だつてよ。(久美、仕方なく冷蔵庫に、後を追う恭平) お年寄りには親切にしようぜ。

久美 (ミネラルウォーターを取り出しながら) 死んでなかったんだから、計画は中止よ。

恭平 なあ、久美、

久美 コップ探してくる。(上手に消える)

恭平 (重吉を見る) …孫かな。水すぐ持つてくるから、お爺ちゃん、(重吉、怪訝そうな顔) なんて、お父さん。

重吉 うん。

恭平 息子か。

(久美、コップを持って登場。久美に愛想笑いする恭平)

久美 知らない。(コップに水を注ぎ残りの水を冷蔵庫に戻す)

恭平 なあ、二人の未来の為にさ、

久美 やっぱり初めからその気だったんだ。

恭平 そうじゃないよ、そうじゃないけどさ、一千万二千万、へたすりやも
つとあんだぞ。

久美 どいて、

恭平 俺がやるよ。(久美からコップを受け取り)息子だつてき。(コップを重
吉に)父さん、こぼさないように気をつけてよ。(飲み終わったコップ
を受け取り) もういいの、(久美を見て笑う)

久美 最低、

恭平 成り行きだよ成り行き、こういう展開なんだからしょうがないだろ。

(ドアホーンの声)

久美 こういう展開なんだ、どうすんの、

恭平 まさか、警察、

久美 どうすんのよ、

(再びドアホーン)

清次(陽気な声) ごめんくださうい、ご隠居さうん、ご在宅でしようか。

久美 警察じゃ、ないみたい。

恭平 誰だよ、こんな時間に。

清次(声) 魚屋でうす、宝川商店街の魚金でうす、

久美 魚屋だって、

恭平 何で夜中に魚屋が来んだよ。

重吉 政伸、客だ。

恭平 あの、もう遅いから、放つところよ。(再びドアホーン) しつこいな、

久美 恭平、

恭平 こんな夜中に訪ねて来る奴がどうかしてんだ、放つときや帰るさ。

清次 あのう、電気点いてますよね。

久美

恭平、

恭平

まさか入っちゃこないって。

清次

おじやましますよ、もうお休みかな、

久美

入ってきてんじゃん、

恭平

何だよ。

清次

(声) ご隠居、俺どうしても今夜中にさ、

恭平

久美、隠れろ、(恭平ベッドの下に隠れるが尻が見えている)

久美

隠れるって、

(下手ドアが開き野球のユニフォームを着た清次登場、久美入れ違いに開いたドアの後に隠れる)

清次

(酔っている) どうしても今夜中にご隠居に謝んなかったらさ、俺眠れねえからさ、(重吉を見て) あ、ご隠居いたね。改めまして、七代目魚金の清次です、ご隠居、この通りだ、申し訳ない。(土下座)

(久美はドアの後から見ている)

重吉

政伸、客だぞ。

清次

客、俺、客なんて大げさな者じゃないすよ、とにかく、俺ね、本当に申し訳なくってさ、いや、遅いのも分ってるんですよ、だけどね、だけど俺…(座ったまま前のめりに倒れ、いびきをかく)

久美

(顔を出す久美、恭平に近づき) 恭平、恭平、(ベッドの下から出てくる恭平の尻を叩く)

恭平

いて、(顔を出す)

久美

寝ちゃった、ただの酔っぱらい。

恭平

酔っぱらい、

久美

でも、ご隠居、ご隠居って、知り合いかもね。

恭平

とにかくまずいな、

久美

目を覚ます前にここ出よう。

恭平
そうするか。

(清次、突然顔を上げる) うつぶ、

久美
起きちゃった。

清次
(恭平の顔をじつと見た後) はばかり、

恭平
えっ、

清次
便所どこ、うおつぶ、

久美
トイレ、トイレって、

恭平
どこだよ、

重吉
(上手を指し) 廊下の突き当たりだ。

清次
うおーぶ、(走って廊下の奥へ、暫くして唸り声が聞こえる)

久美
何なのあの入、

恭平
あいつだ、

久美

えっ、

恭平

(久美を部屋の隅へ引っ張り) あいつだよ。

久美

あの酔っぱらいを知ってるの。

恭平

だから、駅前の居酒屋で馬鹿騒ぎしてた連中の話をしたろ。

久美

恭平がこの家の事を聞いたって言う、

恭平

そう、商店街の草野球チームの奴らだったって言ったよな。

久美

あつ、

恭平

そうだよ、俺はその時隣の席で一人で呑んでてさ、そいつらは大人数で盛り上がってて、その時にこの屋敷と爺さんの噂をしたのがあの男だよ。

久美

じゃあやつぱりお爺さんとは知り合いなんだ。

恭平

そんな事は知らねえよ、とにかくこの家の爺さんがものすごいケチで、金は腐る程あるのに商店街の寄付金なんか一銭も出さねえって話をしていたんだよ。身寄りも無いらしいから死ぬ時は墓場まで金を持ってい

くつもりだろうって。

久美 ちよつと待って、お爺さんは亡くなったって聞いたんじゃないの。

恭平 その時はまだ生きてたんだよ。死にそうな位年寄りだって話だけでさ。

久美 良く分かんない。恭平私に身寄りのないお年寄りが亡くなったって言ったじゃん。

恭平 だから居酒屋で噂を聞いたのは一週間くらい前。そんで俺もちよつとした好奇心でこの家の前を通って見たのさ、それが三日前。そしたら玄関先に霊柩車が止ってるじゃないよ、俺はてっきり爺さんが死んだと思つた訳さ。

久美 なるほどね、そのちよつとした好奇心っていうのが怪しいけど、やっぱり恭平のいつもの思いこみじゃん。

恭平 そんな噂を聞いた後だぞ、普通誰だってそう思うだろ。

久美 そうかな、

恭平 そうだよ、思うだけじゃない確信するよ。(久美、恭平を見てため息あれ、何だよそれ。)

久美 ごめんね、でも恭平の確信はいつも自分に都合のいい思いこみなのよ。

恭平 何だ、

久美 言いたくないけど、多分霊柩車も、ただ黒い車が停まっていたのが恭平にはそう見えたのよ、だから恭平は、(固まっている恭平に気づき)あれ…恭平、

恭平 か、頭来た。

久美 あのね、

恭平 言ったな、言ったな久美、

久美 恭平ゴメン、私言い過ぎた。

恭平 そうか、俺は幻を見たんだ、あれは霊柩車じゃなくてタクシーかトラックだったんだ。

久美 だから、可能性として、

清次 (トイレから戻る) いや、さっぱりしたな。

恭平 (清次に) おい、あんた近所なんだろう、見てないかな霊柩車、三日前、この家の表に霊柩車停まっていただろ。

久美 恭平、

恭平 な、停まっていたよな、見てないかな。

清次 ああ、確かに停まっていたよ、霊柩車。

恭平 そうか、あんたもあの霊柩車見た、(久美に) 聞いたか、聞いたか久美、これでも俺の思いこみか。この人もちゃんと霊柩車を見てるんだよ。

久美 …恭平、

清次 見たも何も、あの葬式を仕切ってたのは俺達だよ。

恭平 は？

清次 この先の路地を曲がった木下さんちの婆さんが亡くなったんだよ。そういう時は同じ町内のよしみ、みんな手伝うもんさ。

恭平 木下、さん、

久美 お婆さん、

清次

あそこんちの前は道が狭くて車なんか入らないからさ、出棺前の一時間くらいかな、こちらの玄関先に霊柩車待機させて貰ったんだ、何か問題だったかな。

恭平

あ、いや、

清次

そうかい。ところで、お宅ら誰、こちらご隠居の一人暮らしの筈だけど、

恭平

えっ、

久美

あの、私たち、

清次

それに、(見回す) この部屋何かあったの。

久美

あ、それは、

重吉

強盗だ、

恭平

へっ、

重吉

強盗なんだ。

清次

強盗、

恭平

あゝ、あの、

清次

ご隠居、本当ですか。(身構え恭平達を睨む)

重吉

通帳はどこだ、金を出せと脅された。

恭平

そ、そんな事、

清次

この野郎、(恭平の襟首を掴む)

恭平

ちよ、ちよつと待ってれよ、

久美

違うんです、私たち、あの、

清次

年寄りの一人暮らしを狙いやがったな。

恭平

う、だからそれは、その、

久美

強盗じゃなくて、でも、

清次

警察に突きだしてやる。

恭平
いてててて、

久美
やめてください、

重吉
政伸、

恭平
いてててて、

重吉
政伸、

久美
(叫ぶ) 政伸、

恭平
は、はい、

清次
ん？

重吉
政伸、あの強盗はどうした。

恭平
えっ、あ、あの、

清次
政伸？

久美
二人で、撃退したのよね、政伸。

恭平　　そ、そうそうそうそう、この必殺右ストレートでノックアウトよ。

清次　　ノックアウト、

久美　　でも、しぶとい強盗で、すぐに立ち上がって逃げちゃったのよね。

恭平　　そうなんだよ、親父の事が心配で追いかけれなかったのが本当に残念だ。父さん、強盗は逃げちまったよ。

重吉　　役に立たんな。

恭平　　ごめん、ごめん、

清次　　親父って、じゃあご隠居、この二人は、

恭平　　息子、息子息子、

久美　　そして、息子のガールフレンド。

清次　　あ、何だ、そういう事、あそうか、俺もうてつきり、いや参ったな、早く言つてよ、いや申し訳ない。

恭平　　いいって事、気にしないで、誤解を招く様な状況だったから。

久美

そ、そうよね。

清次

悪い悪い、でも、強盗に入られたなんて物騒な話だね。警察に連絡は、

恭平

そ、それなんだけどね、とりあえず親父も無事だったし、

久美

そう、それが何よりだもんね。

清次

しかし、

恭平

ところで、おたくは、

久美

何か、ご用ですか。

清次

あ、俺、あくそうだよね。こんな遅い時間に、非常識だよね、いやこれまた申し訳ない。遅いのは分ってたんだけどね、どうしてもこちらのご隠居にお詫びしたい事があって、

恭平

お詫び、

清次

実はね、

(ドアホーンの音)

久美 今度は誰、

ノリ（声） こんにちは、

タンキチ（声） 夜分すみませ〜ん、

清次 あ、あの声はノリとタンキチだな、

久美 え、

ノリ（声） 魚金の清さんおじやましてませんでしようか〜。

律子（声） 清さん、隠れたってだめよ、ここにあんたの汚いスパイクがあるんだから〜。

清次 律子だよ、く〜、みんな揃ってやんな。

久美 あの、

清次 （叫ぶ）うるせえな〜、お前ら今何時だと思ってるんだ〜、

敏子（声） 清さ〜ん、

公子（声）

清さくん、

恭平

何なんだよ。

清次

申し訳ない、みんな俺のダチで（ユニフォームを）これこれ、チームメイト。

恭平

それが何でこんな夜中に、

清次

多分俺を追いかけて来たんだな、心配しなくていいよ、すぐに追い返すから。

久美

お願いします。

清次

夜中に騒がしちまって、本当に申し訳ない、（退場）

恭平

ふく、

久美

私たちが何やってんの、

恭平

逃げるタイミングのがしたな、

久美

顔だつてばつちり見られたし、

恭平 とにかく、魚屋をさっさと追い出して、俺らも早いところずらかろう。

公子（声） 本当にいいのこんな時間に、

清次（声） そう言わずに挨拶だけしてけて、

恭平 えっ、

久美 まさか、

清次（声） 心配はいらねえって、ざっくばらんないい人たちなんだから。

久美 追い返してないじゃない、

清次 （登場） もたもたしてねえで、入った入った。

久美 あの、

律子 （登場） おじゃまします。

公子 （登場） 夜分すみません。

恭平 お、おい、

ノリ

(登場) こんばんは。

久美

こんばんはって、

恭平

ちよつと待ってくれよ、

清次

挨拶は全員揃ってからだよ、

タンキチ

(登場) どうも、どうも、

久美

あの、

敏子

(登場) 遅い時間にすみません。

ママ

(登場) 清さんがお世話になってます。

清次

全員入ったか、しかしお前ら良くここが分ったな。

律子

何言ってるのよ、あんな話の最中に居なくなっちゃたんだから、すぐに分るわよ。

敏子

清さんの性格だもん、ねえ。

ノリ

だけど清さん、常識的に言ってこの時間は無いよ。

タンキチ

そうだよ、

清次

ばか、世の中には常識に優先する真心つてもんがあんだよ。

ノリ

出たよ清さん得意のフレーズ、

公子

真心は生ものだ、

敏子

新鮮な内にとどけなかったら伝わらねえんだよ。

清次

その通り、

タンキチ

魚金の刺身じゃないんだからさ、

清次

何だと、

敏子

そりゃ清さんの気持ちは分かるけど、

久美

あの、

公子

こんな時間に押しかけられた人の気持ちを考えなきや、

タンキチ

そうだよ清さん、へたしたら犯罪だよ。

清次 タンキチこの野郎、お前は大げさなんだよ。

久美 あの、

律子 何言ってるの、ちっとも大げさじゃないわよ、

ノリ そうだ、清さんが悪い、

清次 てめえら寄ってたかって、

ママ 清さん、私もこれはちよつとやり過ぎだと思わ。

清次 あれ、ママに言われると俺も返す言葉がねえな。

敏子 何ママにだけ素直になつてんのよ、清さん。

ママ 心配になつてみんなで後を追いかけてきたんだから。

公子 そうよ清さん、こういう事つてね、

久美 (叫ぶ) すみませくん、皆さん(一同静まり、久美に注目) あの、一

体何なんですか皆さん、

恭平　がんばれ、久美、

久美　今何時だと思ってるんですか。もう夜中二時を回ってますよね。他人の家を訪問する時間じゃないですよね。

（しばしの沈黙）

律子　清さん、この人たち？

清次　ああ、紹介が遅れちまって、えっと、まず、この人がこちらのご隠居の息子さんで、確か政伸さん、

恭平　あ、そう政伸です。

清次　そんでもってこつちが政伸さんのガールフレンドで、えっと、

恭平　久美です、

久美　何紹介してんのよ、

恭平　あつ、

律子　そう、息子さんなんていらしたんだ……とにかく、今夜は申し訳ありませんでした。おっしゃる通り、非常識な時間にお邪魔してしまつて、

清さん、だから言ったでしょう。

清次

律子、

律子

やっぱり、どんな理由があつたとしても、こんな時間に人様のお宅に押しかけちゃいけないよ。

清次

そう、だよな。

律子

お掛けした迷惑は取り返しがつかないけど、お詫びは又日を改めるとして、今夜はこれで退散しよう。

清次

分つたよ。

久美

良かった、分つて頂けて、

恭平

うん、良かった。

律子

清さん、念のために聞くけど、勿論こちらに伺つた訳はもうお話したんだよね。

清次

それが、まだちゃんとは、

律子

そうなの、

恭平

でも、それはもう別に、

律子

敏子、あんたどう思う。

敏子

まずいね。

律子

まずいよね。

久美

いや、だから、

律子

公子はどう思う。

公子

このままじゃいけない。

律子

やっぱりそうだよね。

恭平

あの、

律子

チームのエースが不祥事をしでかして、それにうちらも乗った、

敏子

高校野球だったら甲子園出場は夢と散るね。

恭平

はっ？

久美

あの、

律子

しかも、フェアプレイが信条の宝川イーロスのエースが、わざとボールを当てに行った、ビーンボールを投げたと思われてる、そんな感じだよ。

ノリ

りっちゃん、そいつはまずいよ、

タンキチ

何とかしなきゃ、清さんだけじゃなくて、俺ら野球が続けられない。

恭平

そういう問題じゃないと思うけど、

タンキチ

りっちゃん、

律子

分った清さん、ここはうちらが盾になってあんたに代わってしつかり謝るから、

久美

は？

清次

律子、

律子

清さんは男の本懐をちゃんと果たしな。

清次
すまねえ。

久美
あの、こちらとしてはすぐに出てって貰えるだけで、

律子
せーの、

一同
ごめんなくさい。

律子
本当にごめんなさい、迷惑は百も承知んですけど、きっと話せば分かって貰えると思うのね。

ノリ
そう、何で清さんが今夜、こんな時間にこちらを訪問させて頂いたのかって、

久美
それはもう結構です。

律子
話せば長い物語、なんだけど、

久美
やめて下さい、

敏子
あ、もちろん、時間はとらせません。

公子
ダイジェスト版でお送りしちゃうから。

律子

話させてよ、じゃなきやうちらも眠れないもん、

久美

お帰りください。

恭平

帰ってくれよ。

律子

何よ、話を聞く位いいでしょ。

恭平

何言ってるんだよ、だいたいあんたらな、

重吉

政伸、

恭平

ん？

重吉

政伸、

恭平

な、何だい、父さん、

重吉

今夜は客が大勢だな、

恭平

ごめんね、うるさくして、すぐに帰ってもらうから、

重吉

いや、賑やかで、こういうのも悪くない。

恭平

え、

重吉

ゆっくりしてって貰いなさい。

ノリ

やっぱりご隠居年の功、

タンキチ

話が分る、

恭平

ちよつと待ってくれよ。

律子

良かったね清さん、

清次

ああ、

敏子

おじいちゃん、ありがとう。

公子

ありがとう。

ママ

清さん、言いたい事あるんでしょ。

清次

そうだな。じゃあ、

敏子

清さん、頑張って、

清次

(一同拍手、久美、恭平なすすべ無し)

ご隠居、まずはこの度の宝川商店街主催交通事故遺児育英基金への多大な寄付、本当にありがとうございます。(深々と礼) そりや金額でびびって急に手の平ひっくり返したようで情けない話だけどさ、三千万なんて寄付、商店街始まって以来だからさ、ご隠居がそんな事してたなんて知らなくて、俺さっきまで飲んでたママんとこの向日葵で、例によつてさんざつぱらご隠居の悪口を言つたのよ、そしたらさ、横で飲んでた民生委員の国江田さんが、急に怒り出しちゃつて、俺、国江田さんに殴られちゃつたよ。それで今度の寄付の話を知つたのよ。本当に申し訳ねえ。思い返せばさ、ご隠居が六年前俺たちの練習グラウンドだった空き地にこのお屋敷をおつ建ててからの因縁だもんな、あ、空き地は元々俺たちが勝手に使わせて貰つただけなんだけどね。ご隠居もほら、あんまり人付き合いの良い方じゃないからさ、それに俺たちとは何か人間の種類が違うようでさ、こちとらガサツだから、そりが合わねえで結構トラブルもあつたよな(急に涙ぐみ声にならな

い)

敏子

清さん、

タンキチ

清さん、

清次

だけど、だけどさ、俺たちは表面だけでご隠居の事を判断して、ちや

んとご隠居の事を知ろうとしてなかったんだよな。本当に、本当に申し訳ねえ。国江田さんの話だと、近頃じゃご隠居もすっかり身体を悪くしてるって言うしさ、俺っちも同じ町内に住む人間として、ここらでいがみ合いは手打ちにして、何か出来る事があつたら、是非手助けしてえと思つてさ、いや、そうさせて下さいって、お願いに上がったんだよ……ご隠居、この通りだ。(頭を下げる)

ノリ

ご隠居、

タンキチ

ご隠居、

敏子

お爺ちゃん、

(重吉、にっこりと笑う)

ママ

清さん、

律子

あんたの真心が届いたよ。

一同(口々に)

おめでとう、良かったね。

敏子

はいはいはい、(重吉を中心に、左右に久美と恭平を引き寄せみんなを並ばせる)みんな並んで、仲直りの記念ね。(携帯のカメラで)はいち

ーズ、カシヤ、

恭平

久美く、

久美

あゝ、

清次

いや嬉しい、嬉しいよ俺は、

ママ

本当良かったわね、清さん。

清次

ご隠居、あ、それからお二人さんも、これからはさ、俺たちの事は家族だと思つてよ。

恭平

あ、はい、

久美

ありがとうございます。

清次

いやめでたいよ、なあノリ。

ノリ

うん、今となつては笑い話だけどさ、ご隠居とは本当戦争だったもんね。

タンキチ

本当、本当。

清次　　律子、こういう機会だからさ、ちよいとだけ、な、

律子　　そう来ると思ったよ。そうね、こういう時だし、いいよね政伸さん。

恭平　　え？

敏子　　カンパイ、

清次　　ノリ、タンキチ、角のコンビニで、ビールな。

ノリ　　あいよ、

タンキチ　　行つてきます。（ノリ、タンキチ退場）

ママ　　結局こうなるんじゃないかと思つたわ。

清次　　今夜は飲み明かそう、なあ政伸さん。

敏子　　清さん、乾杯だけよ。

恭平　　もうどうにでもしてください。

ママ　　じゃあ、私達はちよつと場所を空けましょうか。

公子　そうね、これじゃあね。

敏子　ねえ、この部屋、

清次　今頃気づいたのか、このすつとこどっこい、聞いて驚くなよ、

恭平　あの、清さん、

清次　うん？

恭平　あんまりその、大げさな話にしたくないんで、

久美　そうそう、

清次　あ、そうか、そうだよな、分った。

敏子　何なのよ、清さん、

清次　言わぬが花よ人生はつてな、

公子　何よそれ、

清次　いいからとにかく、手伝いの手始めだ、ちやっちかちやっつと、この部屋を片付けようぜ。

律子

そうね、やっちゃおう。

(全員で片付け始める)

久美

(恭平に) どうするの、

(恭平「逃げよう」という仕草。上手ドアに向かおうとする二人)

律子

ねえ、政伸さん、

恭平

は、はい、

律子

どこに何を片付けたらいいのか指示してくんない。

恭平

ああ、それはですね、

久美

衣類は全部ダンスの中、あと、その他床に落ちてる物は、適当に、その開き戸の中に押し込んで貰えたら、ね、

恭平

うん、

敏子

了解、

(一同、指示されたように片付ける。再び逃げ出そうとする二人)

公子 本は、本棚でいいんでしょう、

久美 お問い合わせします。

敏子 帽子って衣類かな、

恭平 とにかく適当に、

清次 ほらほら、(ドアの辺りから久美と恭平を引き戻し)二人はご隠居と一緒に座って見ててよ。

恭平 ありがとうございます。

清次 しかし、ご隠居にこんな息子さんが出たなんて、驚いたよな。

敏子 そうよね。

律子 全然見なかったもんね。

恭平 あの、いろいろ事情がありまして、ずっと離れて暮らしてたんで、

律子 いいのいいの詳しい事は、どこの家にも色々あるし。

敏子

そうよ、ただ、こちらにそういう感じの人の出入りが無かったから、

ママ

勝手に身寄りの無いお年寄りって事にしちゃってたのよね。

清次

それもこれも、俺たちが初めからちゃんと近所付合ひしてれば良かったって話よ。

敏子

本当、そうよね。

清次

あ、そう言やあこつちの事は何もはなしてなかったよね。俺たちは宝川商店街の草野球チームでイールスってのよ。

久美

はあ、

清次

監督が鰻屋で、イールってのは鰻って意味なんだよ。

公子

監督曰く、つかみ所のないチームを目指してるのよね。

敏子

それで、私達はイールスの私設応援団、ピンクイールス。

律子

まあ、本気で応援してる訳じゃなくて、いつも一緒に飲んで騒いでるだけ、清さん達とは腐れ縁でさ、

敏子

あと、ママは私達のたまり場、スナック向日葵のオーナーで、イールスの知恵袋。

律子

昔は銀座でお店やってたのに、何故かこんな下町に居着いちゃった変わり種なのよね。

ママ

こっちの方が性に合うだけ。

公子

ねえねえ、政伸さんて仕事は何やってる人なの。

恭平

え、俺はその、

ママ

弁護士さん、

恭平

えっ、

ママ

…違うか、

恭平

あの、

ママ

何となく、そんな感じかなって、

恭平

俺、今は求職中で、

ママ
そう、いい仕事見つかるといいわね。

公子
(エレベーターのボタンを押す) あ、開いちやった。(ドアが開き中には車イス) 何これ、かわいい、ちっちゃな車庫みたい。ねえ、政伸さん、この車イスはどうしたらいい。

恭平
え、そうだな、どこか適当に、廊下の奥にでもかたしといてよ。

ママ
車イスはベッド脇でしょ。

恭平
え、あ、そうか、親父さんが、

清次
政伸さん、もしかして知らなかったのかい。ご隠居、一月位前から車イスなんだよ。

律子
買い物とか不便だろうからって、民生委員の国江田さんも色々手助けしようとしたんだけど、みんな断ったみたい。

恭平
そうなんだ、

清次
そうなんだって、あんた息子だろ、

恭平
うん、まあ、そうだけど、

清次　　だったら、あんたがしっかりしてくれよ。

恭平　　そうだよな、いや、だから遠くに住んでたから、ずっと連絡も取れなくて…帰ってみたら車イスか、いや参ったな。(笑う)

(一同、恭平に冷ややかな視線)

公子　　遠くって、どこなの、

恭平　　え、あり、北海道だよ、

清次　　それだって電話位できるだろ、今時日本に住んでて、連絡がとれないなんて言訳だろ。

恭平　　それは…。

敏子　　車イスだけじゃ無いの、(重吉を伺いながら)お爺ちゃん、近頃話す事とか、様子も変だって、

律子　　まあ、私達もさつき国江田さんから聞くまで、全然知らなかったんだけどね…。

敏子　　ついこないだまで清さん達と本気でやり合ってたのに、こんな事にな

ってたなんて…。

恭平 そうか、なるほどね、でもほら、人間誰だって歳はとるし、しょうがないよね、こればかりは。

清次 だから、何なんだよその言い草は、

恭平 えっ、

清次 俺っちだってこんなに心配してるのに、あんた、よくそんな人事みたいな言い方が出来るな。

恭平 いや、そういうつもりじゃ、

清次 ご隠居は自分から助けてくれて言うような人じゃねえだろ、だから息子のあんたにさえ連絡しなかったんじゃないのかい、だったらあんたの方から連絡でも何でもするのが、

ママ 清さん、それ以上は家族の問題よ。

清次 …そりゃ、そうだけどさ、

ママ それに、これまでの事はともかく、政伸さんもお父さんの事が心配に

なったから、又一緒に住もうつてこうやって帰ってきたんでしょうから。

清次
そうなのかい、

恭平
あ、うん、そういう事だよ。(久美、怪訝そうに恭平を見る)長い事親不孝したけどさ、そろそろ親の面倒位見なきゃな。

清次
政伸さん、

久美
あのさ、恭へ、(恭平に遮られる)

恭平
それに、もうすぐこいつと結婚するんで、ちょうどいい機会だしね。

久美
ちよつと、(恭平を引き寄せ、耳打ち)その場しのぎの言訳、それとも作戦、

恭平
本気だよ。

久美
もう思いつきでいい加減な事言うのはやめて、常識無いけど、すごくいい人達じゃないの、こんな人達を騙したら、

恭平
(他にも聞こえるように)久美、よつく聞いてくれ、急にこんな事言

い出して、お前はきつと面食らつてると思うけどな、俺は本気で言つてるんだよ。

久美

やめてよ、

恭平

俺はさ、単純に皆さんの気持に感動したんだ。赤の他人だよ、赤の他人の清さん達がここまで一生懸命になつてんだよ、俺、自分が恥ずかしくなつたんだよ。

敏子

政伸さん、

久美

そんな予定じゃ無かつたじゃない。

恭平

そう、確かにちよいと顔を出してすぐに出て行く筈だったけどさ、ここに住んで親父さんの面倒を見る事にした。

久美

本当は、違ふ事を考えてるでしょ。

恭平

考えてねえよ。

久美

そんなの無理に決まつてるでしょう「政伸」。

恭平

そりゃあ色々不都合や問題もあるけどさ、

久美 無理、不可能、あり得ない、

律子 久美さん、親が年取って身体が弱くなったら、

恭平 (律子を手で制し) 無理も無いんだよ、こいつは俺の事をよく知ってるから、俺今まで本当にいい加減だったから、

敏子 久美さん、政伸さんを助けてあげてよ。

公子 久美さん、

律子 今まで何があったか知らないけど、もう一度信じてあげたら、

久美 …。

清次 (久美の手を取り) もう決まりだよ、そういう事でいいだろ。

タンキチ (声) ただいま。

律子 祝いの酒盛りだね。

敏子 めでたいね、本当にめでたいよ。

タンキチ (ノリと一緒に登場) お待たせ、お待たせ、

ノリ

つまみも酒も足りなきゃいくらでも追加オーケーだよ。

公子

勘定は清さん持ちだよ。

清次

あたぼうよ、勘定でも何でもドンとこいだ。

敏子

清さんめずらしく太っ腹、

律子

(清次の腹をなでながら) 近頃本当に太っ腹だよ、清さん、

清次

何しやんでえ、

タンキチ

そろそろコレステロール心配しなきゃ、

清次

何だと、

ノリ

いざとなったらご隠居と一緒に俺達が面倒みるよ、な、清さん、

清次

(恭平に) こういう奴らだよ。野菜も虫食いの多い方が安心して食えるっていうけどさ、こいつらも見てくださいの悪い分中身は保証付きだよ。

(照明次第に暗くなる。クロスして下手に一人離れる久美にスポット)

律子 見てくれまであんた達と一緒にしないでよ。

敏子 身も心も美しく、

公子 ピンクイールスのモットーです。

清次 口は悪いが人間は真つ正直だ。江戸っ子は、

久美(声) (遠く聞こえる清次達の声をバックに)どうしよう、恭平はまだきつと、お爺さんのお金を狙ってる。

タンキチ はいはい、五月の鯉の吹き流し、

ノリ 口先ばかりで腸は無しってんだよな、清さん。

清次 ノリ、タンキチ、てめえら俺の言う事をいちいち先回りするんじゃねえよ。

公子 清さんの決め台詞は耳ダコだもんね。

ノリ そういう事、そういう事、

久美(声) この人たちの優しさは何なんだろ。

ママ りっちゃん、車イスこっちに、

律子 えっ、

ママ 御隠居さん、多分お手洗いでしょ、

清次 分かった、ここは俺に任せな、

ノリ 清さん酔ってるからダメだよ、俺がやるよ、

久美(声) 何か、不思議な、懐かしい優しさ…。(照明F0)

闇の中、上手に眠る恭平にスポットF1、やがて窓の外が白んで来る。眠っている恭平を見下ろしている律子と敏子と公子。

公子 政伸さん、政伸さん、(恭平、眼を覚ます) お早う。

恭平 …お早う…まさのぶ? あくそう政伸だよ俺、お早う。

律子 何寝ぼけてんのよ。

恭平 いや。そっか、みんな結局、